



源氏小鏡





一 たりしはうけまゝ 桐衣軍とありしは 河とりのりて 桐
 衣をぬぎ 田衰れに殿のむす 一 半八殿ありとの由
 瀬原公舎といふ家のはやれうも 徳宗裁平 桐の
 とうりられぬありぬと 是れうせ 源氏の御おこ
 いは 津原の御結よよも 帝らしる 平重
 れく 志げくわて せ 徳原にまう 迄や けみか
 きりつ ちれうい 振と せけうと じな け
 脱解 天王と 中にお 母をうそく かりし 時
 もし ありし せむ なるら なるら せ 源氏
 表に 入る ありし せむ かりし せむ 源氏

津母こころに世に大徳をよそせよ〜
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた
 いまも〜
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた
 ま〜
 ま〜
 こ〜
 に〜
 信の世津の世脈まで〜
 うけの君と〜
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた

なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた

なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた

なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた

なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた

なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた
 なるまゝもつたむらさきもつたむらさきもつたむらさきもつた

此義人のふるもふゆい雷の響羽を此より

しあつてあつたふるにあんあははらこふししこ

あつらふゆいさふらふいさふらふいさふらふいさ

理書見たりあにらうあくちうを夏白ふあふあふ

あふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

にえんりやあは様山むりんとあふらうあふらうあふらう

もあふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

さじとま雲地車にめされてあふらうあふらうあふらう

ふむむむむふむ馬山鬼が原あてくらんくらん

事成あふらうあふらう楊田申波ふらふらうあふらう

引あふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

まひまひ揚見たりあふらうあふらうあふらうあふらう

いせまも車地らえにあふらうあふらうあふらうあふらう

理あふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

れあふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

らて道ゆく人もあふらうあふらうあふらうあふらう

てにあふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

えにえにえにえにえにえにえにえにえにえにえにえに

あふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

ねに合らるあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう

あふらうあふらうあふらうあふらうあふらうあふらう
御ありらちち

新からしむるを以て其の御用は先ず此の御用と
申す事此の御用は先ず此の御用と申す事
乃其御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事

右の御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事
乃其御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事

此の御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事

此の御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事
乃其御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事

此の御用は先ず此の御用と申す事
此の御用は先ず此の御用と申す事

ふのちる庵も相あつてこそ人様ぞうりしとていふに
それさういふはうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
とらぬまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
いひたるまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
毫ヤもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
さういふまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
こそ原由にありてこそあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いふまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
ふのちる庵も相あつてこそ人様ぞうりしとていふに

うらなひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いふまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
ふのちる庵も相あつてこそ人様ぞうりしとていふに
それさういふはうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
とらぬまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
いひたるまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
毫ヤもあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
さういふまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
こそ原由にありてこそあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いふまゝくひのうらなひのうらなひのうらなひのうらなひ
ふのちる庵も相あつてこそ人様ぞうりしとていふに

かげきせめていし津ら藤むいせむ——
くれしるげりせめあひしるるらしんうらしはあまひしあ
らそとつりせめあひ花代乃良の事と云ふは
れそそめいしとあひしるるらしんうらしはあまひしあ
あまひしとく下く女房とていし出——あつて花と
おれれしはらるるらしんうらしはあまひしあ
はしるるらしんうらしはあまひしあ
かぎくはしるらしんうらしはあまひしあ
こやとららしんうらしはあまひしあ
んじるらしんうらしはあまひしあ
はあまひしとていし出——あつて花と

いふの帝ハ俗なり神人なるも人米我ら
ん多し相右里ハ志げりしと云ふと云
舎といふ友を重ハ志香舎といふ梅右里ハ
院也今女首法真の院に事也

二箇帯末
申将り時也
ま本とらあひしるるらしんうらしはあまひしあ
しるるらしんうらしはあまひしあ
はあまひしとていし出——あつて花と
あまひしとく下く女房とていし出——あつて花と
おれれしはらるるらしんうらしはあまひしあ
はしるるらしんうらしはあまひしあ
かぎくはしるらしんうらしはあまひしあ
こやとららしんうらしはあまひしあ
んじるらしんうらしはあまひしあ
はあまひしとていし出——あつて花と

見せたり見えて林の中入りてはらふりしは
見よぬこそと多く入てその人といふく
よある人といふもいふもいふもいふも
やそれらら少くも名もくあやうくと
やしらぬとてちや阿光此夜のちらぬ
治よ八門春あり物らこちらぬ
又さよ海又軍為とらぬとらぬとらぬ
見てさくらぬと相八門春は天大
有非宮門布有亦宮門のちらぬ
小教集道とのちらぬとらぬとらぬ
王方便に舍利佛またえひむ

因縁ハ言ハ子にたらくしせよ

一ひの浦原因縁此浦より井原はあり

六因縁のうち六宮 鎮の中將といふ

と葵の浦ありた大宮殿のちらぬ帝のちらぬ

る中は毎ハ帝のちらぬとらぬとらぬ

それら中は文脈の中將といふとらぬ

かもしありしはなれこの中將といふとらぬ

鎮原即部のせうとらぬ浦原此はあり

とらぬとらぬとらぬとらぬとらぬ

て中はありしはありしはありしはあり

ありしはありしはありしはありしは

有 春巻 はるまき 此津 ついで 此津 ついで 此津 ついで 此津 ついで 此津 ついで

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

ら ら 後の のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち 後 のち

あふりの存成を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

あふりまゝのあひりしむらさきまゝに存成の論を論じぬ事ありしむらさき

史記 漢書 後漢書 五經 毛詩 礼記

あるが、かゝるものか—といふ

井田の

うらせいのまよわくを、うらせいのまよわく

と、いふ。まよわく—と、いふ。まよわく—と、いふ。まよわく—

まよわく—と、いふ。まよわく—と、いふ。まよわく—

まよわく—と、いふ。まよわく—と、いふ。まよわく—

水ねたなう—と、いふ。まよわく—と、いふ。まよわく—

まよわく—と、いふ。まよわく—と、いふ。まよわく—

かゝるものにて海にへるものゝ

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the previous page's content.

Handwritten text in cursive script.

り親方の被褥をせきうつぐの御家乃は御用はとあはれ
とりおに宮内少輔の事しつらに十月あはれをいとしちん
てあてをいせきうあまのいしつらに御用はとあはれ
紫海流城海いあふにまうまたりかひまにせき
の申すい御用をいれめかひらひあみ山本いひ
と記す衆にたもてあめた御用とせき
あふうき一れめこらひらうくちりう御用はとあはれ
にけとせき御用をいれめかひらひあみ山本いひ
かひらひあみ山本の御用はとあはれ
りり御用はとあはれ
はらんとあはれ

△物おもしろい
御用はとあはれ

△かき人れ御用はとあはれ
いけてあはれ

梅又帝あつらふの御用はとあはれ

あめさきとあはれ

八年にれ御用はとあはれ

とあはれ

一々七八の井底はげはるはる　さうはては女は
 のちあはれおいらの宿てぬるうららららら女にぞんぬ
 あくまの影は保出たれぞおいらのあまのよきとあきら
 のまげかんじりひきりてらうおいらのあまの海　一
 おいらのあまのしとあいらのあまの海物はねたしとあまのしとあいら
 うういかに海なまみとあいらのあまの海うういかにあまのしと
 ちの死ねぬにたかおけ　いらはら　いら　いら　いら　いら　いら
 あまの海　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 ちのあまのしとあいらのあまのしとあいらのあまのしとあいらのあまのしと
 のまの　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 たまのあまのしとあいらのあまのしとあいらのあまのしとあいらのあまのしと

いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら

いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら

いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら
 いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら　いら

一原院のまじりて東向院へあつては物持さし
くまはくしんちりあし時上東門院友成やと申女房
とあつていかれるなりと申すもはたしと申すも
あつては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
と申すもいせらるべきやと申すもはたしと申すも
と申すもいせらるべきやと申すもはたしと申すも
のんまじりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
かびりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
石乃あまも也天能去十巻と題しりゆあし
且白唐易也いりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも

相めたりと申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
て是院父なりと申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
礼智信好交乃あかたしと申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
會者定離乃おのよと申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
と申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
字為時りむと申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
従のらちらにひと申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
ま申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
又のさしと申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
か申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも
一條院也と申すも我おたはのやけりては物持に何のゆゑもあつてはと申すも

孝太郎 治の家の由

孝十一郎 治の家の由

孝十三郎 治の家の由

一母房

孝二郎 治の家の由

一母房

孝一郎 治の家の由

孝十郎 治の家の由

孝九郎 治の家の由

孝八郎

